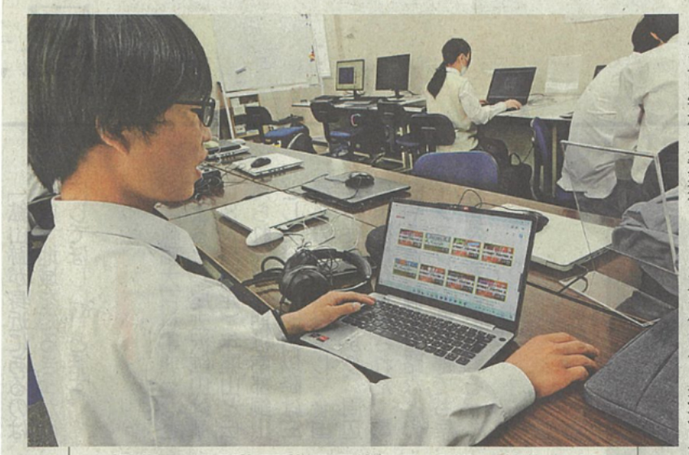
秋田魁新報　2024年7月20日付

自由度、専門性が魅力

あきた 通信制高校のいま 下

行政の関わり方に課題



授業内の活動で動画編集に取り組む藤本さん

タブレットや教科書を使って学習する安部さん（右）。分からないところは教職員がサポートする

県内の通信制高校は生徒の一人一人の体調や目標に合わせた教育を展開している。通っている生徒たちは、充実感を持って学習や学校生活を楽しんでいるようだ。

関心ある分野追究

「体育館もグラウンドもないけれど、他の学校とは違う経験ができる。やりたいことに思う存分取り組める。良い意味で特別な学校です」

公立中学校を卒業後、自分のペースで学習したいと秋田クラーク高等学院（秋田市大町）に進んだ藤本陽向さん（2年）はこう語る。週5日登校するITプログラミングコースに所属し、コンピューターに関する実践的な知識を幅広く学んでいる。

入学前から動画編集に興味があり、クラークでは外部講師のITコンサルタント・高崎翔太さんから助言を受けながらテロップ入れやカットの技術を磨いてきた。

現在は高崎さんたちが運営するオンラインのプログラミング教室でユーチューブの動画制作を担当。「やりたいことを話したらすぐに先生方がサポートしてくれ、いろんなことに挑戦できた」。関心ある分野の能力を伸ばせる環境に喜んでいる。

入学当初から休まず登校する藤本さん。今後の目標は高卒資格取得のための学習と、動画編集の勉強とを両立させることだ。「将来は自分が身に付けたスキルを生かせる職業に就きたい」と意気込む。

さくら国際高校秋田キャンパス（同市山王）の男子生徒（1年）は公立校での生活にうまくなじめず悩んでいた。知人の紹介でさくら国際を知り、入学を決めた。

芸術や写真、音楽などを多角的に学べるコースに在籍。授業は週3回で、登校できない日はオンライン出席が可能。自分の体調に合わせて学べるといい、「生徒それぞれに合った方法で勉強できるのが魅力。先生たちもよく相談に乗ってくれる」と話した。

「集団生活窮屈」

第一学院秋田キャンパス（同市広面）の安部朝海さん（1年）は同じ第一学院に通っていた姉の影響もあって、進学先に選んだ。「公立中学校で集団生活を送る中、みんなと同じように行動しなければならない雰囲気が何となく窮屈だった」と振り返る。

現在は週2日登校。それ以外の日はアルバイトをしたり、自宅でリポートを書いたりしながら過ごしている。「校則が厳しくなく、アルバイトもできる自由さがいい。ホームルームで他の生徒と趣味のことを話すのも楽しい」

各校はオープンスクールの開催やフリースクールとの連携を通じ、中学生らに魅力を発信している。安部さんも中学3年の時に参加したオープンスクールで明るく接してくれた先輩が印象に残り、入学前の生徒をサポートする活動に興味を持っていると言う。「自分も誰かを支える存在になりたい。進路に迷っている中学生には、やりたいことに取り組める道に進んでほしいと伝えたい」と語った。

通信制高校に通う生徒が増えている現状について、県教育庁高校教育課の久慈隆正課長は「生徒の実情に合う学びの選択肢が増えているということであり、プラスに受け止めている」と話す。

クラークや第一学院など複数の県で施設を運営している広域通信制高校は、本校のある都道府県が教育活動を把握しているとし、「行政の仕組み上、秋田県が各校と協力し生徒と関わることはできない」とした。

実態把握不十分

他方、広域の通信制高校を巡っては、設置認可した自治体の監視や実態把握が不十分だとの指摘もある。10年ほど前には全国の複数の広域通信制高校で教職員ではない施設職員が、本来行うことのできない添削指導や面接指導などに携わっていたことが発覚した。利益目的の運営企業が現れるリスクも懸念されている。

秋田大大学院の佐藤修司教授（教育行政学・法学）は、支援が必要な生徒が多い中で行き届いたケアを行うには多くの人員や時間が必要になると説明。「生徒数が一気に増えると適切な設備や人員の配置が追いつかなくなる恐れがある」と話す。

教育行政による設置段階の審査を強化することが重要だとした上で、広域通信制高校については「本校が所在する一つの自治体で十分な監督を行うのは無理がある。国が責任を持つべきだ」と述べた。

（清水美沙）